

京都と地蔵盆 山路 興造

「京都をつなぐ無形文化遺産」という制度は、国や京都府へ申請して認めてもらう文化遺産ではなく、市民が地域と世代をつなぐ伝統として選ぶ文化遺産である。私は大変気に入っており、あちこちで講演を頼まれて話す機会に、この制度の宣伝をしている。そしてこの度、この制度による文化遺産の一つとして地蔵盆を選ぶお手伝いができたことを嬉しく思っている。

いま地蔵盆と呼んでいる行事は、江戸時代、明治半ばまで「地蔵祭」とか「地蔵会（じぞうえ）」と呼んでいた。この行事は町の構造と深く結びついている。明治以前、京都の町は、道の両側の住戸の集合として成り立っていた。治安のため、両端には木戸があって、木戸番がいた。道は住戸の延長で、仕事の場としても使われ、子ども達にとっては、大人たちの目の行き届く安全な遊び空間だった。昼間は通行できるけれど、一定時間になると木戸が閉められ、それから後はくぐり戸からしか出入りできなかった。

木戸の手前の町内の端に、お地蔵さんの祠（ほくら）と、ちり溜めが置かれていた。町内の端、となりの町内との境近くにあったという意味

では、ムラ境にある賽の神と同じようなものだった。そして町内の人たちは、お地蔵さんに町内の安全をお祈りしていた。

いま、地蔵盆のときに、あまり通行の妨げにならないような道路を一時通行止めにして、地蔵盆のテントを張ったりするのはその名残である。

明治5年に木戸が廃止され、京都の道路を拡幅して近代都市にするためには、お地蔵さんの祠は邪魔だから壊せということになってしまった。お地蔵さん受難の時代である。さいわい地蔵盆は明治の半ばに復興して盛んになる。京都の市民が活気を取りもどした証拠だろう。学校教育が普及して、同年齢で組織されるようになって、長い夏休みには、地域の異年齢の遊びの集団が復活することとも無関係ではないだろう。

今後、地蔵盆はどういうふうになっていくのだろうか。時代の変化に合わせてたとえ少しばかり姿が変わっても、とにかく続いていくことが大事だ。昔のやり方を復活するばかりが正しいとは思わないけれども、昔のやり方がどうだったかを知って、その通りやってみようという町内があってもおもしろいと思う。（談）

（京都をつなぐ無形文化遺産「地蔵盆」審査会委員、京都市文化財保護審議会委員）

地蔵盆とお菓子 太田 達

地蔵盆は子ども時代を京都で過ごした者にとっては、共通の懐かしい思い出だ。いま地蔵盆はもっぱら子ども達のための行事のように思われているが、実は大人達には夜の宴会があつて、ちょっと言いにくいことも、お互いさらっと言い合つて、かどが立たない、貴重な交流の機会であつた。そういう部分が今忘れられているのは、町内にとって少しもつたないと思う。

私は私学の小学校に通っていたので、地元の小学校に通う子どもたちから少し離れた存在だったが、学校の夏休みの宿題は、「地蔵盆に出て、そのことを作文に書いてきなさい」というものだった。キリスト教系の学校だったが、その先生は地蔵盆が宗教行事というより、地域の連帯を確かめる大事な民俗行事だという考えだったのだろう。今考えると素晴らしい先生だった。

もうひとつの思い出は、地蔵盆の最後にもらえる白雪糕（はくせんこう）というお菓子である。卍の模様が上に入った大きな落雁で、中にあるこが入っている。原料は米粉と砂糖で、いま食べると甘すぎるように思われるが、甘いものが貴重だった時代には、夏の終わり、子ども達の



身体が弱った頃に、栄養を補給するという大きな意味があつたのだと思う。

大人になって、その菓子を作る側になったときは大変だった。ふつう落雁などの木型は、四つ五つを同時に作れるようにできているが、この木型は1個ずつしかできない。店の職人から「一人一人の子どものために、心を込めて作るもの」と教わつたが、それを何千個と作るのである。最盛期にはうちだけで4,000個くらい受注していた。

それが昭和58-59年頃から、袋菓子やアメリカから来たハンバーガー・チェーンのお子様セット引換券にとって代わられた。そっちのほうが、格好が良いと思われてしまったのだろう。伝統が失われることが残念でならない。(談)

(京都をつなぐ無形文化遺産「地蔵盆」審査会委員、
(公財)有斐斎弘道館代表理事)

地蔵盆の昔と今 松浦 俊海

お釈迦さまは、インドで 2500 年も昔に修行して悟りを開かれた。「過去には悟りを開いた仏さん達がいろいろとおられる。みなさんもその仏さん達にすがれば救ってもらえますよ」と大衆に教えを説かれた。その教えが仏教で、地蔵菩薩もその仏さん達の仲間なのだが、これから仏になられる、まだ修行中の身なので、頭はお坊さんと同じ形、着衣も一般の人と同じで、いつも庶民大衆の中におられて、子どもやお年寄りなど弱者を救ってくださるのだ、と信じられている。

昔は栄養状態も悪く、医療も発達していなかったので、子どもが乳幼児期に亡くなる事が多かった。親たちは身近にあるお地蔵さんに「無事に育ちますように」あるいは「亡くなった子どもが賽の河原で鬼に苛まれないで、無事に浄土へ行けますように」と祈った。お地蔵さんに、赤ちゃんのように「よだれ掛け」を着けるのは、そうした母親の切ない祈りの現れである。

お地蔵さんを祭る縁日は、昔は「地蔵祭」とか「地蔵会」と呼ばれた。お盆が終わってすぐにそれが来るので、お盆の続きのように思われて、地蔵盆と呼ばれるようになったのは近世になってからである。8 月の下旬、子どもたちが田舎や海・山から戻ってくる

というタイミングのよい時に、町内の役員がいろんな趣向を凝らして、子ども達のために催すようになった。

この機会には子どもの年齢の縦、横のつながりもできるし、大人達も夜には打ち上げをして隣人同士の交流を楽しむ。このような向こう三軒両隣の相隣関係は大事なことで、特に災害時にはその効果が発揮されるのである。

壬生寺には明治の初めから、京都の都市計画で立ち退きになったお地蔵さんが多く集まってきているので、現代はお地蔵さんのない町内から、地蔵盆のときだけに借りに来られる。団塊の世代が子どもの頃は、新しい住宅地や団地が増え、お地蔵さんのない町内へたくさんお貸ししたが、今は少子高齢化で、それもずいぶん減ってしまった。

対象となる子どもが一人もいない町内が続出している。子どものいない地蔵盆は淋しいが、地蔵盆を中止しないで、大人だけでもお地蔵さんを祀って、自分達の子どもの時代の思い出を語り合い、親睦を深めて絆を強くすれば、お地蔵さんも喜ばれると思う。それが新しい地蔵盆のスタイルになってもよいのではなかろうか。(談)

(京都をつなぐ無形文化遺産「地蔵盆」審査会委員、壬生寺貫主)

◇かつて「地蔵盆」は

文献からみる地蔵盆行事

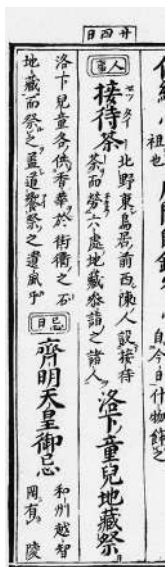
地蔵盆は、江戸時代前半より、地蔵祭、または地蔵会と称されて、京都では盛んに行われていたことが、文献からわかっています。

地蔵盆を記した最も古い文献のひとつに『復古集』があります。僧侶であった鈴木正三の遺稿類や生前の言行を整理したもので、そのなかに「京中辻々ノ地蔵祭、去年七月ヨリ童部共、見事ニ致シ候、此五月ニモ盆ヲ待兼候テ辻々ニテ祭ヲ見事ニ致シ候」と記されています。市中の辻々にて地蔵祭が開かれていることや、子ども達が主催していること、そして7月に行われたことが読み取れます。7月は盆月で、今で言う8月ですが、おもしろいのは、7月には昨年からはじまったと述べていること、そしてそれがよかったので今年は盆を待ち切れずに5月に催したということです。鈴木正三は明暦元年（1655）に鬼籍に入るので、この記述が指し示す内容は、江戸時代のかかなり早い時期のものだといえます。この頃に、地蔵盆が盆に行われるべき行事として定着しはじめたのかもしれない。

京都の年中行事を考える際の基本的な文献のひとつに、儒医・黒川道裕が記した『日次紀事』があげられます。『日次紀事』は正月から順に、様々な行事を記したのですが、7月24日の条に「洛下の童児地蔵祭り」として、子ども達が道端の地蔵を祀ったと記されています（右図）。江戸時代前半には、地蔵盆が京都市中で一般的な行事に成長していることが知れます。この書には、他に「姉小路地蔵祭」として、姉小路東洞院西（の町内）で、地蔵さんと阿弥陀さんの2体の像を町家のミセノマに安置して数珠繰りをしたという記載もあります。

地蔵の顔に化粧をする風習も、江戸前期の記録にすでにあります。延宝2年（1674）刊行の『山城四季物語』には、「童子の業として、道のはた辻々の石仏をとりあつめて、地蔵と名付、顔白く色どり、花を手折、供物をささげて、地蔵祭をなすなり」とあります。

このように、現在の地蔵盆の基本的な姿は、すでに江戸時代前半にはできあがっていたことがわかります。現在、京都の地蔵盆では見ることができなくなった楽しみのひとつに、一式飾りがあります。一式飾りとは、ひとつのついで飾る飾りつけのことです。たとえば、機織りの道具だけを使い、五条大橋での義経と弁慶の対峙を見たとったものです。有名な江戸の戯作者滝沢馬琴が、京・大坂を旅行した旅行記『羈旅漫録』（享和2年（1802））のなかに、「家の前には手すりをつけ、佛像の前に通夜して酒もりあそべり、活花、花扇かけその外器物をあつめて種々の品をつくり、家毎に飾りをく町もあり、」という記述がありますが、「器物をあつめて種々の品をつくり」とあるのが、一式飾りのことです。京都では西陣の笹屋町の一式飾りが有名でした。



『日次紀事』に記された地蔵祭（延宝4年（1676）刊）



『難波鑑』（巻4）に描かれた地蔵祭（延宝8年（1680）刊）

◇◇「地蔵盆」はいま

8 割の自治会・町内会で実施

京都市では、“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の地蔵盆」の選定に当たり、市内における実施状況を把握するため、平成 25 年 9 月～12 月に自治会長・町内会長などを対象にアンケートを実施しました。(回答数 3,684 件、回収率 56%)

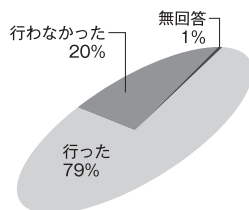
平成 25 年度に地蔵盆を行った自治会・町内会は回答全体の 79% でした。

お地蔵さんを祀っている自治会・町内会は 71% です。お地蔵さんを祀る自治会・町内会のほとんどが地蔵盆を行っていました (94%)。

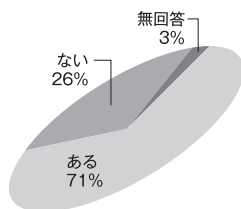
お地蔵さんを祀っていない自治会・町内会で地蔵盆を行ったのは 37% です。その場合、「お地蔵さんを借りてくる」が 26%、「仏画を使用する」が 24%、「その他」が 34% となっています。

開催場所は、「祠の前」が最も多く (39%)、「個人宅」(23%)、「ガレージ等の空き地」(17%)、「集会所・公園等」(12%)、「道路上」(11%) となっています (複数回答)。

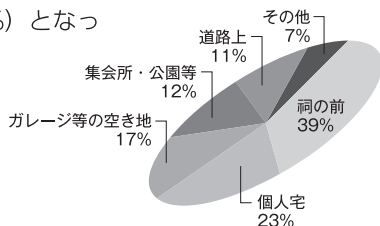
「地蔵盆」の開催状況



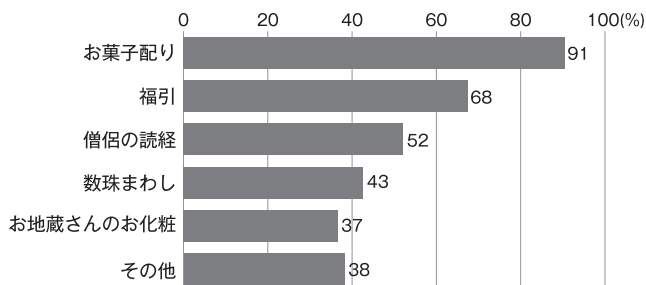
お地蔵さんの有無



開催場所

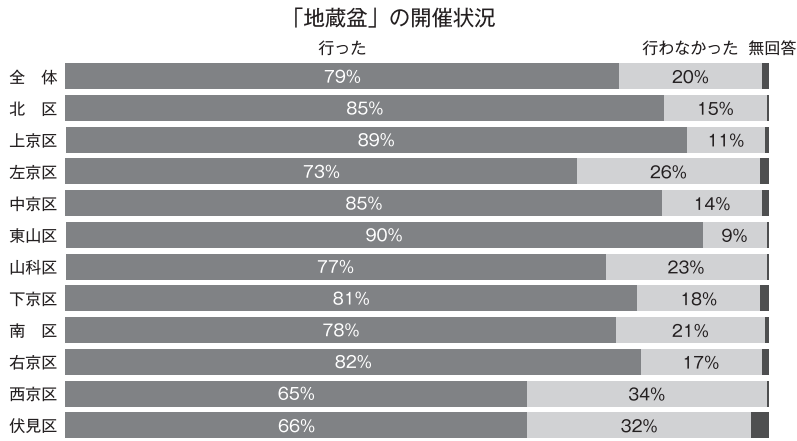


行事プログラム



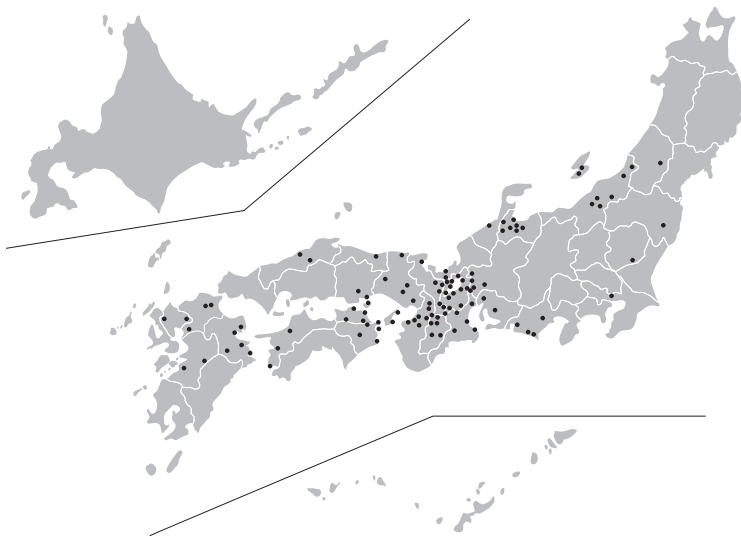
行政区別にみると・・・

地蔵盆を行った自治会・町内会が多いのは東山区（90％）と上京区（89％）でした。



全国では

50 年ほど前に文化庁が全国 1,342 か所の地区で調査した結果、下図の●印の地区で、地蔵盆または地蔵まつりという名前で行事が行われていることがわかりました。（『日本民俗地図 1（年中行事）17 図：盆』国土地理協会 1969 刊）



「地藏盆」は、地域を結びつける大切な行事であり、町の活性化に重要な役割を果たしているという認識から、大学等が独自調査を進めたり、住民グループや個人が、お地藏さんマップや地藏盆のマップをつくったりする取組がいくつも見られます。

ふるさとの良さを活かした まちづくりを進める会 (略称・ふるさとの会) (山科区)

ふるさとの会では、平成 22 年より「山科のお地藏さん調査」を始め、24 年からは「地藏盆」の調査を行った。そして、その過程で作成した『山科お地藏さん巡り』の冊子をもとに 25 年からは住民対象に全 20 回の「お地藏さん巡り」を実施。27 年 2 月に発行した報告書は、これらの取組の集大成である。13 ある学区ごとにお地藏さんと地藏盆の開催状況を紹介するとともに、各学区の見どころを盛り込み、地藏巡りのコース案内となっている。巻末には、263 カ所で行われる地藏盆の開催状況と、560 カ所に及ぶお地藏さんの所在地・分布図を記載している。
(報告書『京 山科のお地藏さん』:A5 判 320 ページ / 平成 27 年 3 月発行)



上京区成逸住民福祉協議会 (上京区成逸学区)

西陣の成逸学区では学区内 26 のすべての町内で地藏盆が行われている。住民福祉協議会は平成 25 年夏、学区内すべての地藏盆について開催日や地藏の種類、会場、行事内容を調査した。市内では多くの地藏盆が 8 月 23、24 日ごろに開催されるが、織屋が多い上京区では職人が休めるお盆に開く町内が多く、15 日開催が半数に上った。

読経はカセットテープを使う町内が 6 町あり、数珠まわしは 19 町が行っていた。終了後に近所との交流を深める場として懇親会を開いていたのは 17 町。

詳しくは、別冊の報告書にまとめられている。(概要版リーフフレット『成逸の夏の風物詩「地藏盆」の記憶』:A4 判 4 ページ / 平成 26 年 3 月発行)



ごく最近、まとめられた調査報告書やパンフレットをご紹介します。

京都府立総合資料館も花園大学と共同調査を実施しました

京都の「地藏」信仰と地藏盆を活かした地域活性化事業

平成 25 年度に資料館と花園大学は、お地藏さんの所在や地藏盆の調査を行った。お地藏さんの分布については、フィールドでの所在調査が 2 年目となる花園大学が、中京区、下京区、東山区を実際に歩いて、お地藏さんの所在を確認し、状況が許せば聞き取り調査を行ってその所在地をマッピング。これに、ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会の山科区データを加えたことにより、中京区、下京区、東山区、山科区については地藏分布をほぼ網羅できたという。同時に、市内の 10 か所と宇治田原町 1 か所について地藏盆の行事把握を行っている。

(報告書: A4 判 38 ページ / 平成 26 年 3 月発行)

東山区役所

「地域の魅力再発見」と称して、区内の知られざるスポットを訪ねる「まち歩きツアー」や、区内にたくさんある「お地藏さん」に関する講演会等を実施している東山区が、お地藏さんや地藏盆の歴史と意義等について紹介する冊子「お地藏さんの物語～お地藏さんと地藏盆のお話～」を作成した。

大人だけではなく、まちづくりの未来の担い手である子どもたちにも読みやすいよう、見開きの左側を大人向け、右側をふりがなと親しみやすいイラストのついた子ども向けのページとしている。お地藏さんのイラストは、京都女子大学家政学部生活造形学科の江口ゼミ 3 回生の協力を得ている。

(パンフレット『お地藏さんの物語 ～お地藏さんと地藏盆のお話～』: A5 判 60 ページ / 平成 27 年 3 月発行)

